

江門農村における開発と保護

Development and Protection in rural Jiangmen

小島泰雄
Yasuo KOJIMA

珠江デルタにおける農村変化は多様である。江門市の2つの村落について、フィールド調査と収集した資料をもとに比較考察を行った。市街地に近接する村落の工業化と都市化、周縁的な村落に残された歴史的建築群をめぐって、それぞれの村落の半世紀あまりの変化を概観した。

キーワード：珠江デルタ，工業化，文化景観，村落，中国

Key words : Pearl River Delta, industrialization, cultural landscape, village, China

I はじめに

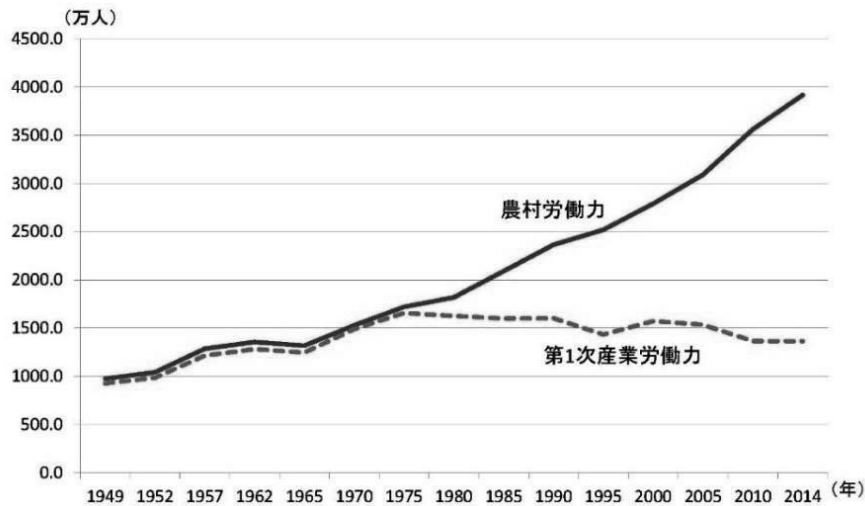
珠江デルタ西部の農村は今いかなる状況にあるのだろうか、その解明が小論の主な目的である。2016年に江門市でのフィールド調査と資料収集で得たデータに基づいて考えてゆく。

まず広東農村の人民共和国期の60年あまりの変化を表した2つのグラフを見てみよう¹⁾。広東省は人民共和国の成立当初から重要な農業生産地域とされ、農村の労働力はほとんどが米の多期作を軸とする農業生産に従事してきた。この状況を転換させるのが1978年に始まる改革開放政策における広東省の位置付けの変化であった。すなわち広東省は経済改革の試行地域、のちには先導地域とされ、産業化が農村にまで広汎に展開してゆくこととなった。

図1は、農村労働力が一貫して増加する一方、農業に従事する者は1980年代以降、漸減してきたことを示す。広東省の産業化が農村工業の発展をその重要な構成要素としたことで、農業従事者は減少していった。一方、省外からも多数の出稼ぎ労働者が農村工業の領域に流入してきたことは、農村労働力の増加として帰結している。

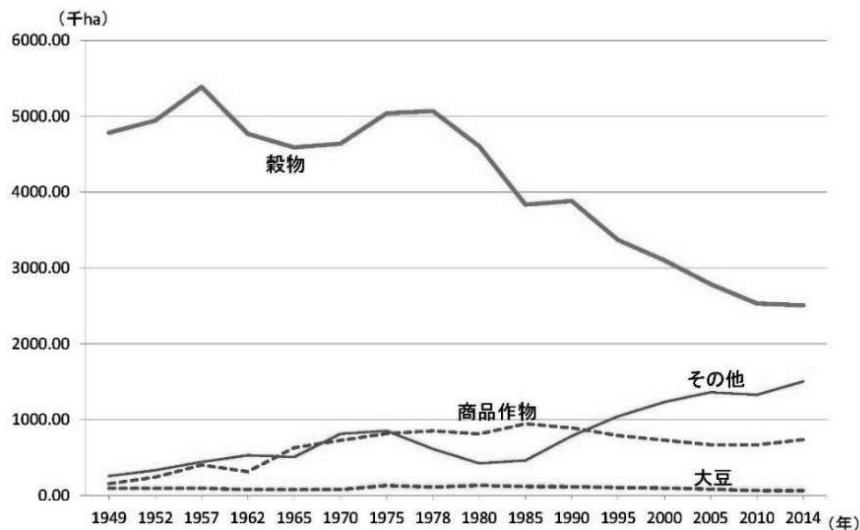
図2にも1978年の転換が看取される。主力の農産物であった穀物の播種面積が1980年代以降に急減していることが象徴する動きである。都市化や食生活の改善を反映した蔬菜生産の伸びを含む、その他の作物の播種面積の増加が補完的に現れるものの、農業の産業化を担う商品作物も漸減しており、改革開放期における広東農業の後退は明らかである。

このように1980年代以降の広東省における農村変化を産業から捉えると、それは非農業化を軸に展開してきたと言えるのであるが、広東省内部において地域的な遅速を伴うものでもあった。



《広東農村統計年鑑 2015》により作成

図1 広東省の農村労働力の変遷 1949-2014



《広東農村統計年鑑 2015》により作成

図2 広東省の農業生産（播種面積）の変化 1949-2014

表1は1990年代半ばに始まる高度経済成長期の広東省の地域別の耕地減少率を3期に分けて示したものである。まず3期ともほとんどの地域で耕地は減少していることが、上で考えた労働力と農産物の動向を反映した、農業の衰退を示すものとみなされる²⁾。

耕地の減少は都市化・産業化や労働力不足、環境悪化などが引き起こす複数の過程において進行するが、広東における当該期の耕地減少は都市化・産業化によるものが主となっていると考えられる。1990年代後半には、深圳と珠海の2つの経済特区と、広州という省経済の中核地域において耕地減少が進んでいた。2000年代前半になると経済特区の減少幅が拡大し、隣接す

表1 広東省における耕地減少率 1994-2014

	耕地減少率 1994-1999	耕地減少率 1999-2004	耕地減少率 2008-2014
広州市	8.6	-7.5	2.8
深圳市	12.1	35.0	0.8
珠海市	12.4	34.6	-21.8
汕頭市	4.9	8.9	-7.2
佛山市	5.3	32.1	13.4
韶關市	0.3	3.0	1.2
河源市	-1.3	5.3	-10.3
梅州市	1.6	9.3	0.2
惠州市	2.1	22.5	2.0
汕尾市	1.1	15.0	-4.7
東莞市	7.7	26.2	1.8
中山市	5.8	26.7	65.1
江門市	3.9	16.8	24.2
陽江市	2.0	5.0	18.7
湛江市	-1.5	13.9	-0.1
茂名市	1.2	-34.3	11.0
肇慶市	1.6	3.7	12.8
清遠市	0.6	8.9	4.9
潮州市	3.3	8.2	-12.2
揭阳市	1.1	5.9	25.7
云浮市	1.4	-0.5	15.6
合計	2.0	7.5	7.3

《広東農村統計年鑑》1995, 2000, 2005, 2010, 2015 年版により作成, 単位%。

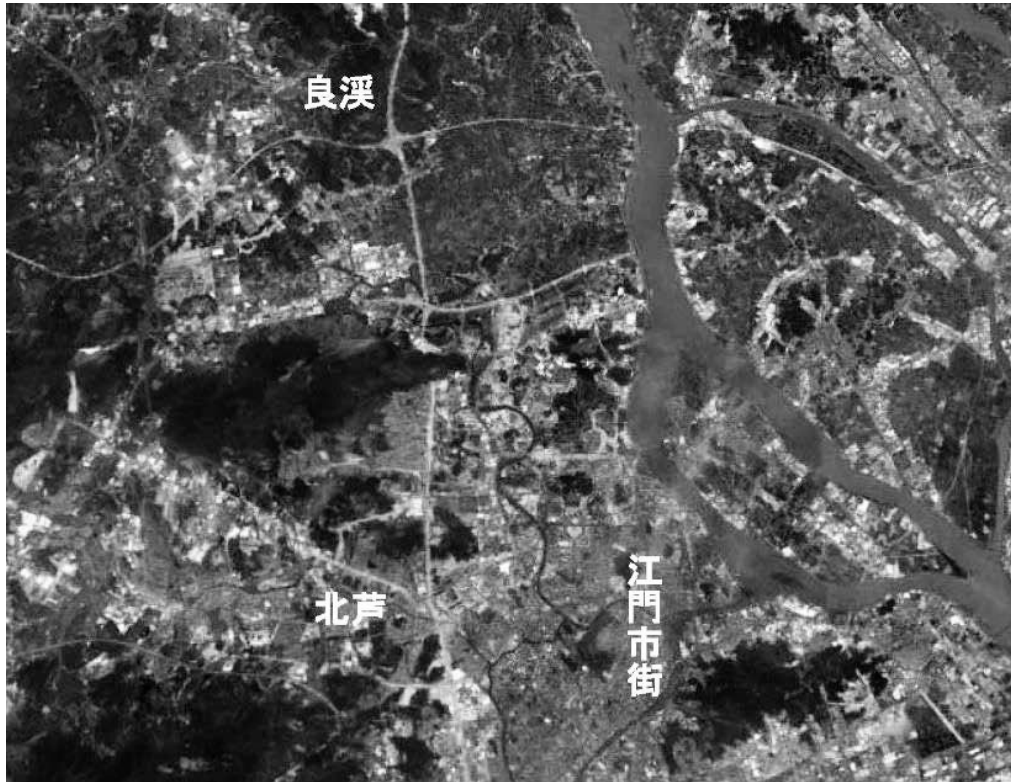
注記: 統計基準が変更されているため, 2004 年と 2008 年の間の比較はできない。

東莞市と中山市においても土地利用の変化が大きくなっている。2008 年の世界金融危機以降には耕地減少は伸びが抑えられたが, 減少幅の大きな地域はより分散的な傾向を示すことがわかる。珠江デルタの西部に位置する江門市の数値変化に注目すると, 農村変化に関しては広東省の後発組に属し, 隣接する中山市を追いかけるように非農業化が進行してきたことがわかる。

小論では 2 つの村落を調査対象に据えて, 江門市における農村変化の現状とその多様性を考えてゆくこととする。

II 調査地の概要

江門市におけるフィールド調査は, 2016 年 8 月 7 日から 15 日まで, 日本からの 8 名の研究者が参加し, 中山大学地理科学与規劃学院の劉雲剛先生と彼の大学院生がカウンターパートとなり進められた³⁾。農村班は, 8 日から 10 日まで江門市街の西 6km に位置する杜阮鎮北芦村を, 11 日から 13 日までは江門市街地の北 15km の棠下鎮良溪村をそれぞれ訪問して, 聞き取り調査と景観観察を行った (図 3)。



Google 衛星画像に調査地点を加筆

図3 江門市における農村調査地点

北芦村が属する杜阮鎮は、江門市街地の西に隣接しており、工業化が進むとともに、市街地のスプロールが始まっている地域である。2016年の「杜阮鎮人民政府工作報告」では、地域総生産額が61.8億元（前年比9.1%増）、工業生産額（規模以上工業増価値）は29億元（同14.6%増）、輸出額3.13億ドル（同13.2%増）財政収入（一般予算収入）2.57億元（同9.6%増）、1人あたり農民収入が2万元を超えた（同8%増）と、好調な経済状況であることが述べられている⁴⁾。同報告からは、工業団地の拡充や住宅団地（小区）の開発が進む様子も看取される。

北芦村は杜阮鎮の東部に位置し、戸籍人口が260戸1089人、流動人口が約2000人である⁵⁾。地域内には2つの工業団地がつくられ、道路沿いには商店や工場が入る中層建築が連続しており、1.4平方kmの村域に農地はわずか45畝、養魚池60畝が残るだけとなっている。集落は南芦村と連担している。

もう一つの調査地である良溪村が属する棠下鎮は、江門市街地の北に位置する。棠下鎮の南部には工業団地が分布しているが、西江に臨む大部分は農地と養魚池、丘陵がひろがっている。2016年の「棠下鎮人民政府工作報告」では、地域総生産額が124.7億元（前年比12.4%増）、工業生産額（規模以上工業増価値）は121.5億元（同37.7%増）、貿易額90億元（同16.8%増）、財政収入4.49億元（同23.9%増）とされる。江門市における郷鎮レベルでは第1位となる経済指標が多く、濱江新区に指定されいっそうの開発が進められようとしている。

良溪村は棠下鎮の中部に位置し、戸数 515 戸、人口 1835 人の村落である。鎮の中心から北に 2km ほど離れ、また江門と鶴山を結ぶ地方道も 1km 西を走るため、棠下鎮の経済発展からは正に距離がある。丘陵を取り巻くように集落が立地し、その周辺には養魚地と農地の農村景観がひろがっている。とくに集落には 12 世紀に來住したとされる羅氏一族の祠堂が残り、古建築も多いことから、2008 年に省の広東省古村落に、2014 年には国の中国歴史文化名村に指定されている。

2000 年と 2010 年の人口センサスを利用して、杜阮鎮と棠下鎮を比較したものが、表 2 である⁶⁾。2000 年時点の人口データにおいては、杜阮鎮と棠下鎮の相違はそれほど大きなものではない。常住人口で 1 万人、戸籍人口で 2 万人ほど棠下鎮が多く、一方、外来人口では 1 万人ほど杜阮鎮が多い。面積では杜阮鎮が 80 平方 km であるのに比して、棠下鎮は 131 平方 km と大きいことから、この時点で 2 つの鎮の違いが主に戸籍人口に由来するもので、産業化の進度が外来人口に反映していると考えられる。

次に 2 時点を比較すると、2000 年代の江門市の産業化・都市化の進展が 2 つの鎮に大きな相違を生み出したことがわかる。ともに人口は増加し、それが主に外来人口の増加によることは共通しているが、とくに杜阮鎮は外来人口の大きな伸びによって常住人口が倍増していることがわかる⁷⁾。さらに杜阮鎮の非農業戸籍人口の増加は、都市住民の流入があったことを、すなわち都市住民向けの住宅建設によって景観的な都市化が進んだことを示す。

このように表 1 の広東省の耕地減少率の変遷について検討したように、2000 年代は江門市においても、珠江デルタ一般にみられる産業化と都市化が本格化した時期にあたるが、杜阮鎮はその影響を鋭敏に受けているのに対して、棠下鎮はやや後進的であるといえよう。続く 2 つの章でこの違いを村落レベルで考えてゆきたい。

表 2 杜阮鎮と棠下鎮

	杜阮鎮		棠下鎮	
	2000年	2010年	2000年	2010年
人口	52,485	101,727	62,770	76,021
うち当地戸籍人口	33,778	41,601	56,920	59,943
外来人口	18,537	59,335	5,733	15,669
うち市内	975	8,235	619	1,792
うち広東省内	4,974	15,449	387	2,160
うち省外	12,588	35,651	4,727	11,717
非農業戸籍	6,748	18,964	4,381	5,816

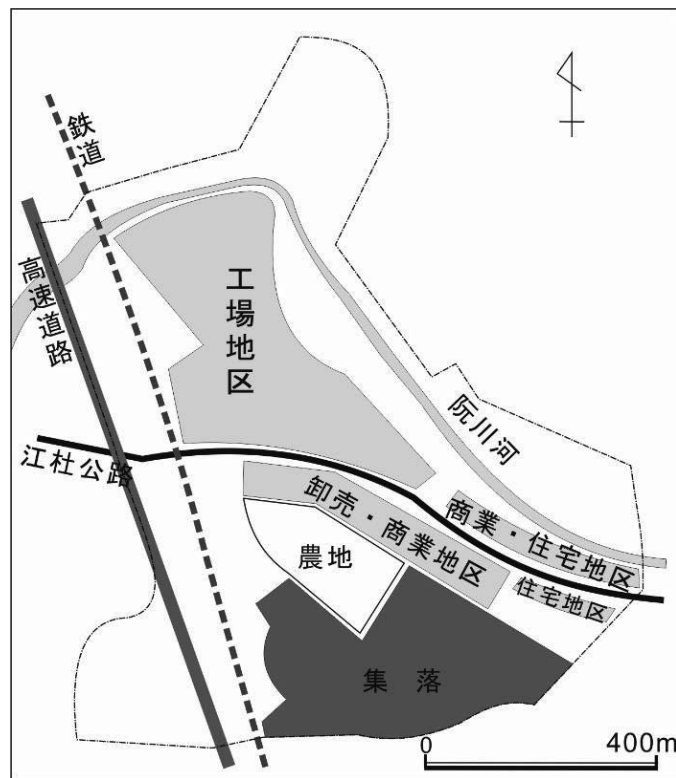
《新会市 2000 年人口普查資料》《江門市 2010 年人口普查資料》により作成

Ⅲ 北芦村

ここでは、聞き取りから北芦村の景観変化をたどることとする⁸⁾ (図4)。

集団化期、北芦村では水稻を中心とした農業が行われており、ほかに葉タバコ、サツマイモ、落花生が生産されていた。広東が中国における農業大省であったように、農業を基幹とした景観が1970年代までの北芦村においても展開していた。

こうした農村景観は1993年から翌年にかけて始まった工場建設で大きく変貌することになる。村落を東西に貫く江杜公路が拡幅整備されたのに伴い、村落の北にひろがる現在の工場地区の東北側に工場がつくられ始めた。それまでも鑄造工場が1つ2つあったが、本格的な工業化が北芦村に到達したのはこのときであった。農地が工業用地として整地して貸し出され、工場が建設された。2002年から翌年にかけては、その西側に工場地区がつくられていった。20ほどの企業が進出してきたが、その多くは江門の市街地にあった企業が、市街地の土地利用転換政策によって、押し出される形で北芦村にやってきたものとされる。省外の経営者もいるが、7割の工場経営者は江門の人であり、外資は台湾の家具工場1つのみである。珠江デルタの工業化は一般に外資と結びついて展開したとされるが、北芦村に現れた江門農村の工業化にみられる内資を軸とした展開は、時期的にやや遅れて始まった結果としてではなく、むしろ内生的な工業化の過程として捉える必要があることを示す。



現地観察と衛星画像に基づいて作成

図4 北芦村の概況

調査時点での北芦村には「五金」と呼ばれる金属加工業が集まっていた。とくにメッキ工場が多く、そのほとんどの経営者は四川や貴州、湖南といった省外の人で、経営規模は小さく、従業員が20人ほどの工場が多い。給料は悪くないが、労働環境はよくないとされる。労働者は村内や付近に部屋を借りて住んでいる。

2006年には道路の西南側に五金市場と称される工場・流通企業地区が作られた（図5）。北芦村の外来人口は、2010年頃には2500人を超えていたが、2015年には2000人ほどに減っている。珠江デルタの工業は世界金融危機を画期とする縮退がみられるが、北芦村にもその縮図が見られる。



図5 北芦村の工場・流通企業地区

近年、北芦村の経済的な軸足は、工業にかわって商業や住宅に移行しつつある。江杜公路にそって中層建築が連続する景観は、2006年に始まったものであり、道路の北側がより新しく、2010年代に建てられたものである。これらの建物の道路に面した1階には、飲食店と金属加工工場、旅館などが雑多に入っている。最も近年の変化としては、住宅マンションが2棟建設され、60戸ほどの村民が暮らすようになった。さらに、都市住民に向けたマンション建設が計画されている。

工場にしても沿道の建築にしても、いずれも集団所有の農地を転用したものである。村民委員会は工場などの企業に建物を貸し出すことで収入を得ており、その一部は村民へ持ち分に応じて分配（「分紅」）されるほか、村民の教育や医療保険などに使われている。村民はすでに農業を離れ、若者は江門などの村外で働く者がほとんどである。ただし出稼ぎはわずかで、広州や仏山へ働きに行く者は少ないとされる。

IV 良溪村

良溪村が歴史文化名村に指定されたのは、ほかでもなく歴史的景観がよく残されているからである。灰色のレンガ（青磚）で造られた家屋が密集し、その間を石板で覆われた小路が縫ってはしる。この景観はどのようにして残されてきたのであろうか（図6）。

外見は堅実で質素な建物も、中に入ると木彫や石刻、壁画が施されたり、タイル敷きであったりする。集落の北と東の入口には防衛施設であるトーチカ（炮楼）が社会情勢の不安定であった民国期に造られている⁹⁾。これらは景観形成とこの村が豊かであったという歴史が結びついていることを教える。他村から 1951 年に嫁いできた女性が良溪にはお金持ちが多かったと語ったことや、良溪羅姓の宗族資産として広州の下町である上下九に 30 余りの店舗があったこと、二五八の日に定期市が良中の土地廟界限で開かれていたことが伝えられている¹⁰⁾。

つぎに過去に形成された景観が現在に残された理由としては、丘陵の裾を縫うように走っていた江門と鶴山を結ぶ公路が、集落の西 1km ほどに移され、交通条件が変化したことがまず挙げられる（図7）。とくに改革開放以降の発展は地域外との結びつきが決定的に重要であり、主要路から外れた良溪の開発は遅れがちであった。

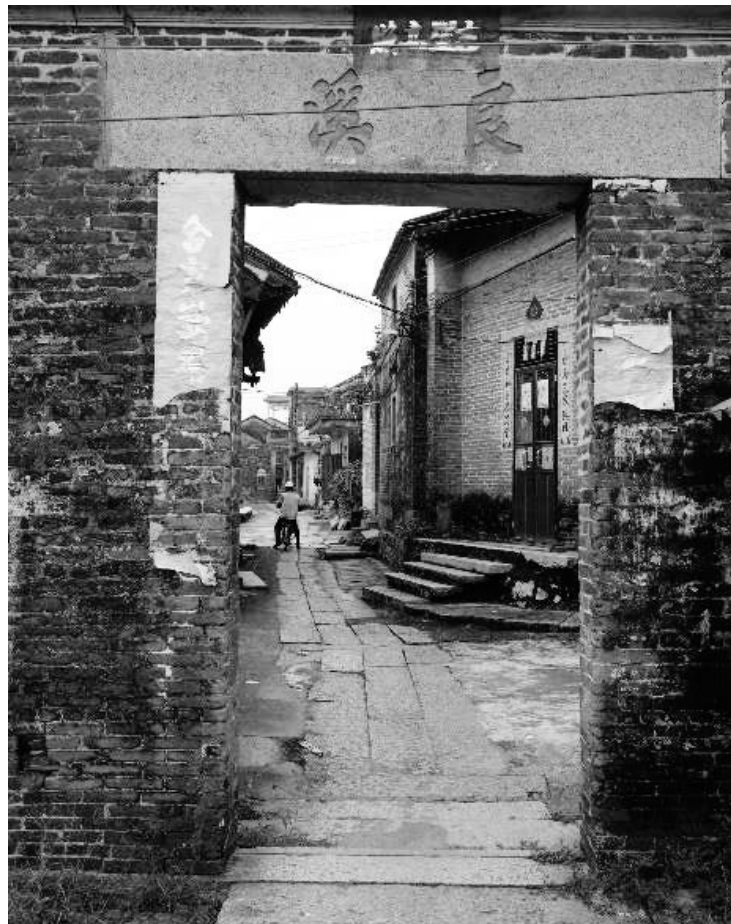
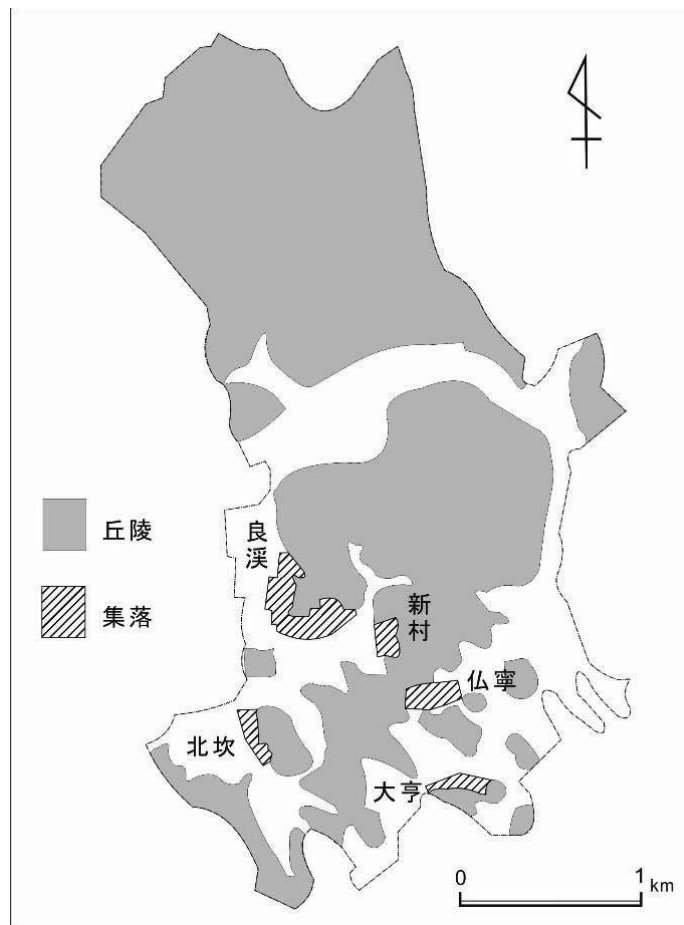


図6 良溪の集落景観



現地観察と衛星画像により作成

図7 良溪村の集落分布

同じく消極的な理由であるが、古い家屋の7~8割が誰も住んでいないとされるように、空き家の多さが集落景観の継続に寄与していることも忘れることはできない。広東農村ではしばしば古い家を残したまま新しい家を建てることが行われてきた。良溪から東に丘陵を越えたところに位置する仏寧の集落は、住宅が南北に列状に並びそれが十数列、西の谷奥から東に向かって続いている。そうした古い集落の前面にあたる東側には、新しい集落がより計画的に並んでいる。

ただし、良溪の歴史的景観は観光開発にはなかなか結びつかず、景観保護に関する村民の理解も深まらない、というのが村幹部の嘆きであった。集落は低湿な農地に囲まれ、それは1970年代半ばから養魚場に改変されていったものの、工場用地への転換はほとんど進んでいない。すなわち珠江デルタにおける一般的な産業化から、良溪は取り残されているのである。その結果、若者の多くは鎮の開発区の工場をはじめ、五邑と呼ばれる江門地区で働き、なかには広東省の他都市で労働者となっている。かれらの仕送りによる収入は住宅の更新に用いられ、景観保護と対立することとなる。

V おわりに

改革開放政策の実施により、珠江デルタは農業地域から産業地域に大きく変貌を遂げた。小論は、その地域的な多様性を考察するために、珠江デルタ西部に位置し、産業化については後発的な江門市をフィールドとした。2つの村落についての記述と分析は限られたものではあるが、事例の背後にひろがる農村変化が共有する文脈性がいくつか浮かび上がってきた。すなわち、工業化が村落ごとの個性として描きうるものであること、それに対して都市化は面的な拡大として時空間を編成してゆくこと、また開発については位置性、とくに交通条件や市街地や鎮区との距離が果たす役割が大きいことである。また集落景観の継続性と空き家の関係など文化景観の歴史性も興味深い検討課題として残されている。

(京都大学大学院人間・環境学研究科)

本研究はJSPS 科研費 15H05169 の助成を受けたものです。

【注】

- 1) 広東省農村統計年鑑編輯委員会《広東農村統計年鑑 2015》中国統計出版社、2015年、456p.
- 2) 《広東農村統計年鑑》1995、2000、2005、2010、2015年版により作成
- 3) 農村班は周雯婷研究員と私で構成された。フィールド調査に際しては、周さんの広東語と調査研究に対する深い理解におおいに助けられた。記して感謝の意を表します。
- 4) 「杜阮鎮人民政府工作報告」2017年1月17日、蓬江区政府HP、
http://www.pjq.gov.cn/xxgk/gzj/drz/201702/t20170224_89180.html
- 5) 「杜阮鎮北芦村基本情况」蓬江区政府HP、
http://www.pjq.gov.cn/xxgk/gzj/drz/201710/t20171016_97033.html
- 6) 新会市人口普查弁公室編《新会市2000年人口普查資料》(2002年)。江門市統計局・江門市人口普查弁公室編《江門市2010年人口普查資料》(中国統計出版社、2012年)。
- 7) 外来人口の来源を人口センサスに見ると、江門市、杜阮鎮、棠下鎮ともに、広西壮族自治区出身者が最も多く、湖南省と四川省の出身者が続いている。
- 8) 北芦村での聞き取り調査は、行政村の幹部2名と一般住民3名に、それぞれ2時間程度行った。
- 9) 蒙勝福(2010)《良溪掌故》嶺南美術出版社。
- 10) 良溪村での聞き取り調査は、鎮と行政村の幹部2名と、一般住民3名にそれぞれ2時間ほど行った。